

## 陳 述 書

裁判長、何度も法廷で陳述をしてきた李熙子です。

今日はまず、この裁判の原告の1人である林西云（イム・ソウン）の話をしたいと思います。去る2月13日、林西云は死にました。今年68歳、脳出血で急死しました。

林西云が逝き、それまでに増して一層私はわが父イ・サヒョンの名前を靖国神社から削除できずには死ねないな、と思いました。日本が起こした戦争で死んでいった人たち、家族の死で傷つき苦痛の中に人生を送ってきた遺族、その声に耳を傾けてほしいという痛ましい訴えをここまで無視して非常識な主張ばかり繰り返す日本政府の態度に、改めて憤りと絶望が深まります。

裁判長、私は父が徴用令で戦地に駆り出されて犬死させられたことが無念でならないのです。亡くなったという事実を知らせもしない日本政府と、父の名前を無断で合祀した靖国神社に激しい憤りがこみ上げるのを感じます。合祀事実を知った1997年から10年以上もの間、取り下げを要求しても家族の意思を無視する靖国神社の態度に息が詰まる思いです。子としての道理を果たせていない自責の念に骨まで痛みます。これが私の味わってきた、そして今でも変わらない痛切な苦しみです。

裁判長、私は2001年8月14日午前靖国神社の前で起こった光景を忘れることができません。私は父の名前を削除してほしいという要請書を携えて靖国神社を訪問しただけなのに、鳥居の前には「汚い朝鮮人は入ってくるな。顔も見たくない。朝鮮人は帰れ！」と狂ったような勢いで大声を張り上げて鳥居をふさいでいる人たちがいました。私は靖国神社を汚そうと汚物を持って行ったわけでもなく、争うための武器をもっていたわけでもありません。その日に私が受けた恥辱的な侮辱感、その精神的ショックは深い傷を残しました。本当になんとも表しようのない、忘れられない日です。いよいよ、こんなところに父を閉じ込めてはいけぬ、一日も早く韓国・故郷へ連れて帰ってあげなくてはならない、それがただ1人の子としての私の道理だと切実に思いました。

裁判長、私にとって父に恥じることをない娘になることが人生に残された課題であり願いです。それは父の名を靖国神社から削除することです。そして韓国の「望郷の丘」の名のない墓碑に父の名を刻むことです。靖国神社に父が合祀されているのは嫌だというのに、それによって心が痛んでつらいというのに、何をもったいぶっているのでしょうか。ただ名前を削除してくれればよいものを。私の父の名を削除したところで靖国神社が減じるわけでもあるまいし、父の名が靖国神社の「お宝」になるわけでもあるまいし、「汚い朝鮮人」なだけなのに、全く奇怪極まりない話です。家族の意思を無視するのは天罰を受ける行為ではないでしょうか。

裁判長、言葉が過ぎたでしょうか。恨みはまた別の恨みを生むといひます。裁判長も目に見える傷よりも精神的な傷がいかにつらいものかお分かりだと思います。日本政府と関係者の方々は、これ以上貧困な弁明をやめて遺族の声に耳を傾け、知恵をしぼって希望のある答えを出してくださるようお願いいたします。賢明な日本の司法の良識を信じています。

2009年2月24日

李熙子（イ・ヒジャ）